神の武具を身につけて（３）救いのかぶと・御霊の剣　　**エペソ 6:10～17**

使徒パウロはエペソ人への手紙を書いたとき、ローマにいました。彼はその時、ある場所に閉じ込められていました。そこでは訪ねてくる人たちに会うことや、差し入れを受け取ることは許されていました。もちろん、検閲はあったでしょうが、手紙のやりとりをする自由もありました。ローマ兵が四六時中、パウロのそばにいました。パウロはローマの兵士が出入りするのを見ながら日々を過ごしたことでしょう。それで、パウロは、キリストの兵士としてのクリスチャンの姿を描くとき、ローマの兵士の姿になぞらえて描くよう導かれたのでしょう。パウロがあげた六つの武具は、そのどれもが、当時のローマ兵が身に着け、手にしていたものでした。最初の三つの武具は、身に着けるもので、「真理の帯」、「正義の胸当て」、そして「福音の靴」でした。残りの三つは手に取るもので「信仰の大盾」、「救いのかぶと」、そして「御霊の剣」です。先週は、「信仰の盾」について学びました。盾は人を守ってくれます。しかし、盾に守られてじっとしていたら戦いになりません。やはりどうなっているかと顔を出して前方やあたりを見回します。その時に「かぶと」がなければ、少し頭を持ち上げただけで、頭に火の矢が飛んできます。ですからかぶとが必要になります。

１）救いのかぶと

当時のローマ兵士のかぶとは皮でできていて、その上に金属の板を貼り付けたものでした。また、そこには飾りがついていました。その飾りは兵士の位によって違っていて、それによって誰が指揮官なのかがすぐわかるようになっていました。当時、かぶとは頭を守るものであると同時に、それをかぶる人の地位を表わすものでした。クリスチャンにとっての「救いのかぶと」もそうです。イザヤ 61:10 に「私は主にあって大いに楽しみ、私のたましいも私の神にあって喜ぶ。主が私に救いの衣を着せ、正義の外套をまとわせ、花婿のように栄冠をかぶらせ、花嫁のように宝玉で飾ってくださるからだ。」とあります。古代には、服装は身分を表わすものでした。王族や貴族と平民では服装に違いがありました。王族、貴族は決して貧しい身なりをしてはならず、平民は豪華な服を身に着けることは許されませんでした。しかし、平民が身を飾ることを許されるただひとつの日がありました。それは結婚式の日です。そのとき花婿も花嫁も、まるで王族、貴族のように身を飾ることができたのです。そのなごりは、現代の結婚式にも見られます。結婚式のとき花婿はタキシードを着、花嫁はウェディングドレスに身を包みます。参列する者たちもドレスアップします。イザヤ 61:10 は神の救いを描いている箇所で、神は、救われた者を、結婚式の花婿、花嫁のように冠と宝石で飾ってくださると言っています。結婚式の場合は衣装は当日だけですが、神が救われたものに与えてくださる「救いの衣」は、永遠に、救われた者を包むのです。神は、救われた者を、神の子どもにしてくださいました。王の王、主の主であるお方の王子たちとし、王女たちにしてくださったのです。ですから、王子が着る服、王女が着る服を与え、その頭に王子のしるしである「栄冠」をかぶせてくださるのです。キリストの兵士に授けられる「救いのかぶと」とはこの救いの栄冠なのです。

クリスチャンは皆「救いのかぶと」を神から授けられています。そのことを私たちは自覚しているでしょうか？自分が神の子どもとされていることを、日々感謝し、そのことに励まされて生きているでしょうか。クリスチャンもまた、さまざまなことで落ち込んだり、自信をなくしたりします。しかし、自分が神の子どもとされているということをはっきりと自覚している人は、それによってそこから立ち上がることができます。多くの人は、人に認められてようとして必死に努力し、それによって自分を保とうとして、疲れ果てたり、自分を人の目に良く見せようとして自分を偽るようになり、平安を失っています。しかし、神の子どもとされる値打ちなど何ひとつない自分が、ただ神の恵みによって神の子どもとされたということを、確信している人は、自己像を保つための無駄な努力から解放されます。罪を悔い改め、謙虚な心で、神の子の身分をあらわす「救いのかぶと」を受け取っていることを喜び感謝したいと思います。

「神の救いを喜ぶこと」、これが「救いのかぶと」の第一の意味ですが、「救いのかぶと」にはもうひとつの意味があります。それは、「神の救いを待ち望む」ということです。「待ち望む」といってもぼんやり

と、ただ時が来るのを待っているというのではありません。救いの完成の時、やがて、顔と顔とを合わせて聖なるお方、救い主なる神に会う日がやってきます。その日のために備えるのです。テサロニケ第一 5:8 に「しかし、私たちは昼の者なので、信仰と愛の胸当てを着け、救いの望みというかぶとをかぶり、身を慎んでいましょう。」とあります。聖書は「救いのかぶと」とは、神の最終的な救いを待ち望むことであると教えています。それは救いの完成の希望を持って生きること、つまりこれからの人生はどんなに身体が衰えてこようと心に弱さを覚えることがあっても、救いの完成への希望をもって永遠のいのちを生きているということです。つまり信仰者はこれからが人生の本番なのです。

２）御霊の剣

さて、六番目の武具、「御霊の剣」に進みましょう。エペソ 6:17 に「御霊の剣、すなわち神のことばを取りなさい。」とあるとおり、「御霊の剣」とは「神のことば」のことです。私たちはこの御霊の剣をどのように使えば良いのでしょうか。

主イエスご自身が神のことばを御霊の剣として使っておられる箇所がありますので、そこから学びましょう。それはマタイの福音書４章です。イエスは、ヨハネからバプテスマを受けたあと、四十日間、荒野で断食し、公の働きのための準備をしておられました。四十日が終わろうとした時、悪魔がイエスに近づきました。聖書を読むと、悪魔はイエスに対して敵意をむき出しにしてやってきたとは書かれていません。イエスが世に出ようとするのを助けてあげよう、その働きにアドバイスを与えてあげようといわんばかりに、いかにも親切ぶってイエスに近づいています。しかし、サタンの狙いはイエスのみわざを間違った方向に曲げてしまおうとすることでした。

四十日の断食を終えて空腹を感じたイエスに、悪魔は「あなたが神の子なら、この石がパンになるように、命じなさい。」と言いました。これは、「パンを得てまず自分の空腹を満たしなさい。そして、人々にパンを与えて、人々の空腹を満たしてあげなさい。世界には飢えた人々が大勢いる。まず彼らの胃袋を満たしてあげなければ、あなたがどんなに神の国のことを語っても人々は耳を傾けはしない。まず人々の必要を満たすことが先決なのではないか。神の子としての力をそのために使ったらどうか。」という誘惑でした。これに対してイエスは「『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばで生きる。』と書いてある。」と答えました。イエスは肉体のいのちをささえる糧ではなく、永遠のいのちを与える糧を優先されました。人々の表面の必要を満たすことではなく、たましいの奥深い必要を満たすことを目指されたのです。もちろんイエスは、食べるものがなく、飢えている人々がそのままでいて良いとは言ってはおられません。四十日の断食で極度の空腹を体験されたイエスが飢えた人の必要を知らないわけがありません。イエスご自身が五千人もの群集にパンを与えておられますし、必要な人々に食べ物を分け与えるようにと弟子たちに教え、教会はそのことに励んできました。けれども、イエスは人々がパンのためだけにご自分のもとに来ることを嫌われました。その時には、姿を隠してしまわれました。パンのために神のことばがないがしろにされることをイエスはよく知っておられたので、この誘惑を退けられたのです。しかも、イエスは、それを聖書のことばによって退けました。「『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばで生きる。』と書いてある。」「…と書いてある。」というのは、最終的、決定的な答でした。

第二の誘惑は、人々をあっと言わせるようなことをしたら人々の関心があなたに向くというものです。悪魔は、イエスを神殿の頂に立たせ、「あなたが神の子なら、下に身を投げてみなさい。」とそそのかしました。この時、悪魔も聖書を引用して、「『神はあなたのために御使いたちに命じられる。彼らはその両手にあなたをのせ、あなたの足が石に打ち当たらないようにする』と書いてあるから。」マタイ 4:6 と言いました。しかし、この聖書の引用のしかたは正しくはありません。これは、詩篇 91:11-12 にある言葉ですが、そこには「主があなたのために御使いたちに命じてあなたのすべての道であなたを守られるからだ。彼らはその両手にあなたをのせあなたの足が石に打ち当たらないようにする。」とあります。ここで

「すべての道で」とある「道」は神に従う歩みを意味します。神から離れてとんでもないわき道にそれたり、道も何もない空中に身を投げるようにとは、聖書は教えていないのです。それで、イエスは、「『あなたの神である主を試みてはならない。』とも書いてある。」と答えてこの誘惑をも退けました。

第三に、悪魔はイエスに、この世のすべての国々とその栄華を見せ、「もしひれ伏して私を拝むなら、これを全部あなたに差し上げましょう。」と言ってイエスを誘惑しました。「世の中はきれいごとだけでは動かない。悪だって必要な時がある。神のことばだけで何ができるというのか、小さなユダヤではなく、ローマで、エジプトで、インドで、中国で、世界を相手に活躍したらどうか。私と手を組めばそのことができるのだ。」というのが、サタンの誘いでした。これに対するイエスの答えも、神のことばによるものでした。「下がれ、サタン。『あなたの神である主を礼拝しなさい。主にのみ仕えなさい。』と書いてある。」マタイ 4:10　その後、マタイの福音書は、「すると悪魔はイエスを離れた。そして見よ、御使いたちが近づいて来てイエスに仕えた。」マタイ 4:11 と書いています。自分の力や権力を誇示したい。自分がもっと高く評価されたい。そういった思いは潜在的に誰でも持っていますのでそこをサタンは攻撃してくるのです。それに対抗できるのはみことばです。神のことばは剣です。みことばの剣には、クリスチャンを守り、サタンを退ける力があるのです。このように見てゆくと、みことばの剣とはそれによって相手を切り捨てるのではなく、心のぜい肉をそぎ落とすと言おうか、自分自身の本当の姿を映し出し、神の真理を明らかにして、それによって自分の信仰を守るという面もあることに気が付かされます。ヘブル 4:12 に「神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄を分けるまでに刺し貫き、心の思いやはかりごとを見分けることができます。」とあります。「両刃の剣」という意味が一方ではサタンの働きに対抗するものであり、他方は神の前にある自分を吟味するのです。

みなさんは、このみことばの剣を持っていますか。昔、金に困った武士は、刀を売って、その代わりに竹で出来た刀をさしました。いわゆる「竹光」です。一応、かっこはつきますが、戦いには役に立ちません。あなたは、聖書を神のことばと信じ、確信しているでしょうか。また、どんなに立派な刀を持っていても、それを使いこなせなければ、芸術品としての値打ちはあっても、武具としては役にたちません。最近、新改訳 2017 に切り替わりましたが私たちはみな聖書を持っています。一冊ばかりでなく、何冊も持っている人もいます。しかし、この聖書を、自分の信仰の成長のために、また、他の人の信仰を助けるために、自在に使いこなすことができるでしょうか。神のことばは飾り物ではありません。実際に使ってこそ意味があります。どのようにしてみことばの剣を使うのでしょうか。それを学ぶのが教会です。礼拝でみことばのメッセージを聞くことによって、聖書研究会で学ぶことによって、また、互いにみことばの体験をあかししあうことによって、私たちは、みことばの剣道を身につけていきます。どこの道場とか、有名な師範を知っていたとしても最終的には自分の身につかなければ使い物になりません。何よりもイエスが聖書を引用して「…と書いてある。」と言われたように、私たちも、聖書を絶対のものとして受け入れましょう。それがみことばを御霊の剣とする第一歩です。みことばの権威を信じ、御霊の剣を手にとりましょう。それによって私たちは信仰の戦いを戦い抜き、霊の戦いに勝利を得ることができるのです。